

Title	STUDIES ON ‘UMDAT AL-ṬABĪB FĪ MA’RIFAT AL-NABĀT (“THE PILLAR BOOK OF THE PHYSICIANS FOR THE KNOWLEDGE OF PLANTS”) : ETHNIC IDENTITIES, LINGUISTIC DIVERSITY AND RELIGIOUS COMMUNITIES OF AL-ANDALUS IN THE ELEVENTH CENTURY
Author(s)	Barraso, Romero Victor Manuel
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/59892">https://hdl.handle.net/11094/59892</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"＞</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">＜/a＞</a> をご参照ください。

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	バラソ ロメロ ビクトル マヌエル BARRASO ROMERO VICTOR MANUEL
博士の専攻分野の名称	博士 (言語文化学)
学位記番号	第 26131 号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語社会専攻
学位論文名	STUDIES ON 'UMDAT AL-ṬABĪB FĪ MA'RIFAT AL-NABĀT ("THE PILLAR BOOK OF THE PHYSICIANS FOR THE KNOWLEDGE OF PLANTS"): ETHNIC IDENTITIES, LINGUISTIC DIVERSITY AND RELIGIOUS COMMUNITIES OF AL-ANDALUS IN THE ELEVENTH CENTURY  『植物の知識に関する医者(の)柱』に関する研究：11世紀アンダルス時代の民族アイデンティティ、言語多様性及び宗教的コミュニティ)
論文審査委員	(主査) 教授 高階 美行  (副査) 准教授 長谷川 信弥 准教授 藤井 章吾 教授 大内 一 教授 森 茂男

## 論文内容の要旨

この数十年間に、ロマンス語とアンダルス・アラビア語に関する膨大な数の研究がなされたが、アンダルス時代にロマンス語とアンダルス・アラビア語は文学言語のレベルに達しておらず、一般民衆の口語であったことから、現存テキストは希少であり、その研究は、特にアラビア文字で記述された若干の現存テキストに関するものに限られていた。

しかし、ロマンス語およびアンダルス・アラビア語研究において、テキストが極めて少ないという事実にも関わらず、スペイン人言語学者とアラブ学者によって、興味深い研究が行われた。その際、これまでに現れた異なる理論を通して、バイリンガリズムとダイグロシヤで特徴づけられるアンダルスの複合的な社会言語学的地図の解明を可能にするほか、部分的ではあるものの、アンダルス・ロマンス語の音声的・形態統語的構造の再構築を可能とするテキストを基に研究が進められた。

アラビア文字で記述されたアンダルス時代のテキストとして、次の3つが挙げられる。(1) ロマンス語とアンダルス・アラビア語のフレーズが直接的に引用される逸話的な歴史作品(2) アンダルスの固有文学であり、古典アラビア語、アンダルス・アラビア語およびロマンス語の影響を受けた *muwašṣahāt* (*harḡa*) や *zaḡal* と呼ばれる作品(3) 11世紀から13世紀の間にアンダルスの自然学者によって編纂され、ロマンス語の術語を記載した農学や植物学に関する科学的著作

本論文では、(3) で挙げた農学と植物学の科学的著作として、当時、多くの科学者が、植物学、医学、薬学、農学といった科学の諸分野で偉大な成果を残したが、そのなかでも、農学研究に専門的に取り組んだ科学者に着目する。11世紀に、セビリア王国において、アンダルス・農学派として知られる学派が形成され、多くの書物が編纂されイベリア半島の農業を大いに発展させた。これらの農学著作は、メソポタミアや東方アラブ諸国の知識を編纂したものではあるが、アンダルスの農民や農学者自身の知識も含んでいる。

そして、農学と植物学の代表的著作に、ロマンス語とアンダルス・アラビア語の語彙を集めた '*Umdat al-Ṭabīb fī Ma'rifat al-Nabāt* (「植物の知識に関する医者(の)柱」) がある。この作品は、セビリアの農学者 *Abū al-Ḥayr* (11世紀) により11世紀から12世紀に編纂されたと推測され、言語学的見地のみでなく実用植物学的見地からも非常に興味深い。複数言語による術語採録で特徴づけられるこの植物学辞書は、膨大な種類の植物に関して、最大で13言語にのぼる多言語による名称の記載がある。

'*Umdat al-Ṭabīb fī Ma'rifat al-Nabāt* に含まれるロマンス語とアンダルス・アラビア語の植物語彙全体に関する研究は、ほかのアンダルスの農業書の植物語彙研究と比べて不十分であり、語源学やスペイン語史に関する多くの研究においては無視されてきた。しかし、同書を研究することにより、アンダルス・ロマンス語の極めて早期の言語状況に関するデータを収集することができ、中世(特に11世紀と12世紀)のイベリア半島における社会言語学的状況の多様性と非均質性の理解に貢献する貴重な情報を取り出すことができる。これは、イベリア半島における後代の言語発展を予想させる言語事実の抽出となろう。

本論文では3つの章に分けて同著に関する分析を進める。

(第1章) 第1章では、10世紀から14世紀までのアンダルス時代の主な植物学書物や植物学者を概観する。まず、アンダルスで、植物科学の出現と発展が可能であった理由を分析する。次に、アンダルスと北アフリカで異なる時代に執筆されたアラビア語辞書、アンダルス植物学書、史料作品を用いて、アラビア語の *munya* (スペイン語の *almonia*、ポルトガル語の *almuinha* の語源なつた。) の来源について調べる。ここでは、アンダルスにおける *munya* の概念を分析し、*munya* の構造と *munya* で繰り広げられた農業的・植物学的活動を明らかにすることを目的としている。異なる時代の最も重要な *munya* の例を挙げ、アンダルスと北アフリカの書物に頻繁に出現する *munya* の別の概念 (*ḡanna*、*bustān*、ペルベル語の *agdal* など) との関係性を明らかにする。これらの語彙は、郊外にある住居や農業の構造体を意味し、それら意味の間で変動し、幾時代にわたり同義語として利用されたが、ヨーロッパ言語には "garden" の意味で曖昧に翻訳され誤解を生むことになった。

(第2章) 第2章では、アンダルス時代に書かれた最も重要な植物学専門書 '*Umdat al-Ṭabīb fī Ma'rifat al-Nabāt* (「植物の知識に関する医者(の)柱」) とその中に見られる多言語による植物学術語を紹介する。同著では5千種以上の植物が分類されており、植物の形態だけではなく、医学的、栄養学的用途の記載があり、多くの植物について複数言語での記載がある。

さらに、本章では、同著作の言語学的側面に着目し、同著に関する従前の研究ではなされなかった試みとして、2つの巻に登場する13言語による植物術語を数量化した。

同書の価値は、複数言語(ギリシア語、アラビア語、アンダルス・アラビア語、ロマンス語、ペルベル語など)による植物名称の記載である。その中でも、古典ギリシア語、アラビア語、ペルシア語(科学的名称)およびロマンス語(一般的な名称)が植物名称記載時の主な利用言語である。そして、ロマンス語とギリシア語による表記がある語彙の割合は、それぞれ全体の17パーセントと23パーセントである。このような、複数言語による語彙の記載は、同著のような書物がほかに現存しないことを考えると、同書は特別な価値ある書物であると言える。

(第3章) 第3章では、'*Umdat al-Ṭabīb fī Ma'rifat al-Nabāt* (「植物の知識に関する医者(の)柱」) を民族言語学的、社会言語学的視点から研究を進める。同書は、純粋に植物学に関するものではあるが、その分析からは、11世紀と12世紀のアンダルス社会を構成する民族集団、言語的多様性、宗教の違いによるコミュニティに関する情報を得ることができる。

同書には植物の科学的名称のほか、当時のイベリア半島のそれぞれの民族で知られていた用語や民間信仰と関係する側面や治療の利用法を知ることができる事柄についての記述がある。また、同書の著者は、同書を記す際、セム語による作品や古典アラビア語の伝統のみでなく、当時の口承文化や大衆の伝統も史料にしていたことにも言及しておかなければならない。この側面は、アンダルス期に存在した異なるコミュニティの民族的・宗教的アイデンティティおよび社会的・言語的多様性に関係し、同著にも多かれ少なかれ反映されている。

さらに、本論文では、アラブ・イスラーム勢力による支配によって特徴づけられるアンダルス社会

のコミュニティ間の統合や同化や相互作用に関する側面にも分析を進める。本論文における注目点と成果は、アラブ、ベルベルおよびスラブなどといった異なる民族集団、イスラーム教徒、キリスト教徒およびユダヤ教徒といった宗教的コミュニティの起源と特徴、アンダルスのアイデンティティの出現に関する疑問、アイデンティティの要素たる領土意識、アラビア語とロマンス語の多様性と相互作用、この著作が書かれた時代のアンダルスにおける非均質的な多文化・多言語という特徴を反映する様々な側面に関する分析である。

まず、同書およびアンダルスの書物において、「アラブ」は、東方イスラーム世界のアラブ人やアラブ人コミュニティを指し示す。そして、「ベルベル」は、同著においても様々なかたちで登場するが、アンダルスの定住したベルベル人の特定の集団や一族を示すわけではなく、北アフリカの部族を示すものである。「*Ṣaḡāliba*」に関する言及については、同著では見られないが、スラブ人奴隷が、当時いくつかの王国で奴隷身分から解放され支配階層の一部であったことを考えると、驚くべきことではない。ただ、著者は、コルドバ北部に位置する「*Ṣaḡāliba*の丘」に数種の植物を集めていたという記載している。この表現は、10世紀に同地に定住したスラブ人奴隷と関係があるものと考えられる。

アンダルス領内のキリスト教徒に関しては、キリスト教徒がアンダルス期に領内に居住することがまれであったことから、歴史書などで言及されることはなく、同書も例外ではなく、キリスト教徒に関する記述はほとんどない。同書におけるキリスト教徒に関する唯一の記述は「アンダルス西部の *Lepe* として知られる *Gibraleon* の近くにキリスト教徒居住している」というものである。10世紀のアンダルスにおけるイスラーム化を考えると、これは、農学書におけるキリスト教徒のコミュニティに関する最も早期な時代になされた記述である。

そして、*ʿaḡam* は、民族的、言語的な視点から、土着のコミュニティを指し示す言葉として同書において頻繁に登場する。さらに、アンダルスのキリスト教徒を指す言葉として、アラビア語を話すキリスト教徒のコミュニティを意味する「*Mozarab*」がある。

そして、本論文では、11世紀に「アンダルス」というアイデンティティが存在していたかどうかという問いにも現時点で可能な検討を試みた。さらに、セブリア人というアイデンティティの存在を立証するのはさらに困難であるが、そのヒントになりうる数少ない記述からは、アンダルス領内の当時のアイデンティティは、民族や宗教によるもののみではなく、政治によるものもあると言えるかもしれない。

なお、本書の著者の慎重な表現法は興味深い。例えば、植物の原産地や育成地を示す際、同書の中で著者が「我々の国 *bilād-nā*」とそれ以外を分類して記述している箇所がある。この記述からは、著者の自国に対する意識を垣間見ることができると言える。

これらの分析から、*ʿUmdat al-Ṭabīb fī Maʿrifat al-Nabāt* は、次の3つの側面（1）ロマンス語およびアンダルス・アラビア語の研究（当時の言語で書かれた作品の残存数が限られているため）、（2）植物に関する当時の知識や伝統（植物名称、用法など）に関する研究、（3）11～12世紀のイベリア半島の民族や言語の状況に関する研究など、にとって極めて貴重で稀有な情報を提供する資料であると言わざるを得ない。

## 論文審査の結果の要旨

本論文 (xi+255 p.) は、イスラームがイベリア半島を支配したアンダルシア時代に行われた農学研究 (10-14世紀) の諸文献の中でも唯一の植物名事典『植物知識に関する医者要諦』(著者名不詳、11世紀末ないし12世紀初頭) の写本と校訂テキストを研究の対象とし、第1部でアンダルシア時代の農学と植物学研究の歴史を概観し、第2部でこの植物名事典の執筆者、写本、編纂・配列・記述情報の原理を考察した上で、多言語 (13言語) による同意語のリスト化 (巻末に収録) と分析を行い、第3部で多言語情報のうちアラビア語とロマンス語語彙の記述に着目することにより、エスニシティ意識の差異と社会言語学的多様性を考察したものである。

一般にアンダルシア時代の言語情報は、支配者としてのイスラーム側の記録言語で古典アラビア語 (書き言葉) が使用されるため、わずかな痕跡を除けば、言語テキストからアラビア語の時代性や地

域性の抽出は極めて困難であり、従来はアンダルシア時代後期の民衆詩や歌謡 *zajal*, *muwašṣaḥa* の一部に記録された言語形式から、当時の日常の話し言葉としてのアラビア語の形式を推定するにとどまり、時代、地域、言語使用者の社会階層について正確な特定が不可能な情報であった。

これに対して、本研究の革新的な研究手法と分析の成果による新事実は、次の点である。スペインにおけるアンダルシア時代の文献研究の主流は、他のイスラーム諸科学に比べ、当地で大いに興隆した農学研究文献にある。修士課程までグラナダ大学でその研究の補助を行い写本読解の訓練を受けてきた本学生は、言語研究者に殆ど知られていないこの植物名事典における記述用語の一貫性に着目し、アンダルシア時代の社会言語状況の分析が可能であると判断し、実際にそうした事実を抽出した。アラビア語とロマンス語の区別は当然として、アラビア語 (文語) とアンダルシアのアラビア語 (口語) を区別し、後者の中に「一般」「我々では」 (=セブリア) 「(セブリアの) 西では」「農夫は」「山地では」等の記述があり、ロマンス語でも「一般は」「ある者たちは」等の区別がある。

このことから判明するのは、限定された植物名を根拠としたものではあるが、非アラブでアラビア語話者のセブリア人学者の中に、アラビア語でも都市と周辺地域の社会階層で、またロマンス語話者の中にも地域性があるとの認識があったことである。これは、従来のアンダルシア時代の言語状況の知見に対して、根拠を伴う新たな事実を付け加えたことであり、アラビア語もロマンス語もかなりの濃淡を伴う社会言語状況にあったことを具体的に論証したと言える。

13言語に及ぶ多言語植物語彙は、ヘレニズム諸科学に立脚し (ギリシア語、ラテン語)、東方の実学 (シリア語、ペルシア語等) を吸収したイスラーム科学と、地中海世界の交錯する文化 (ビザンツ・ギリシア語、コプト語、ベルベル語等) の知識を学んだアンダルシアの学者の網羅的知識体系を示すものであり、個別に分析すれば興味深い言語データであるが、本論文はそこまで及んでいない。また、類似の先行研究もない中で分析手法に苦しみ、論文の有機的一体性に工夫が求められるのも事実である。しかし、総じて見れば、従来のアラビア語研究から極めて異なる資料を基に取り組んだ本研究は、非アラブ農学者の鋭い言語意識と記述に依拠し、アンダルシア時代の社会言語状況に関する研究分野を新たに開拓したと高く評価できる。

以上の論文審査の結果を踏まえ、本博士論文が本学において博士 (言語文化学) の学位を授与するにふさわしい水準にあるものと判断し、論文審査委員会は全員の一致で合格と結論した。